

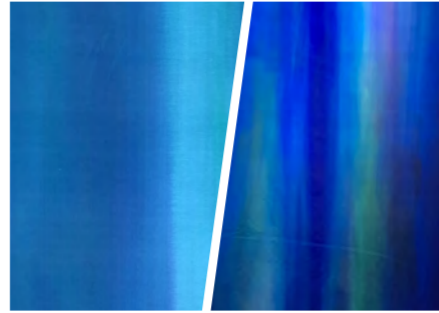
4 絵絹の用途・多様性

令和2年度に行った展覧会にて、染織作家 河村尚江さんに、絵絹を染めて作品を制作してもらいました。絵絹を素材そのままに染色することで、一般に用いられる絹との違いを比較しています。拡大した写真からもわかるように、衣類などに用いられる絹織物は糸を撚って織られています。そのため、しなやかで滑らかな風合いがでますが、染料が入りにくく何度も染め重ねることで染色されます。

一方、絵絹は染料が入りやすく、少ない染め重ねでも深い色合いを出すことができます。絵絹の織りの特徴を際立たせた作品が完成しました。



一般的な絹織物 絵絹



化学染料で5回染色 (えぎぬタペストリー) 《清流》部分 化学染料で30回染色 (作品《天啓》部分)

【染めた感想】

染色された絵絹は、想像を超えて鮮やかで深い色と光沢を放つことが最大の特徴です。絵絹と出会い作品の幅が広がりました。

「かかみがはら えぎぬproject」の取り組み

アートに関わる若い世代に向けて、絵絹や素材の素晴らしさを知ってもらう活動「かかみがはら えぎぬproject」では、実際に絵絹を使ったワークショップを開催することで、このまちの伝統産業について知ってもらうと共に、新たな価値を創出する取り組みを提案しています。



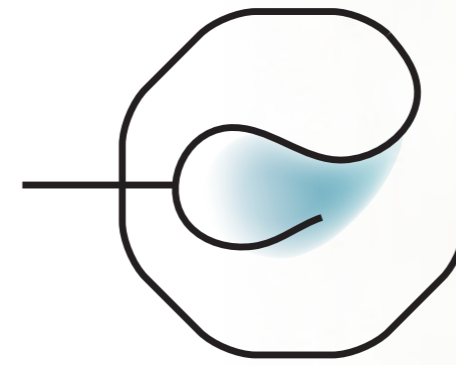
かかみがはらアートピクニック 日本画ワークショップ 「マイファーストえぎぬ作品」を作ろう!



新庁舎展示企画「寿ぐ」



ふるさと納税返礼品 「えぎぬタペストリー」



かかみがはら
えぎぬproject

1 各務原市の織物産業について

岐阜県各務原市の南西部、木曾川の北部に位置する稲羽地区は、桑を栽培することに適した土地でもあることから、古くから農家の副業としての養蚕業が行われてきました。また衣類を作るために機織りも行われ、江戸時代には京都西陣より技術が伝わりました。綿糸による織物業が占める中で、絹を用いた織物としては、長良川扇状地では縮緬織物が発達しました。一方、木曾川扇状地の周辺は「平絹」と呼ばれる、同じ太さの生糸を平織にした絹織物に特化し、大正時代に入る頃には生産体制を整備した繊維工業として盛んになっていきました。

絹織物の中でも絵絹は、装束や御朱印軸、また画材としての需要がありました。各務原市の絵絹を含めた織物産業は、機械化や景気の波に乗って盛況を極めました。その後、戦争や時代の流れに抗えず、現在は、わずかな数となりながら伝統や技術を守っています。その中でも、絵絹は国内で限られた場所でしか生産されておらず、現在もほぼ全国の需要を本市で織られた絵絹が賄っています。(参考文献『各務原市史・通史編』)

2 絵絹の性質・織り方

絵絹は平織りで緊密に仕上げた絹織物です。織物は、^{たていと}経糸と^{よこいと}緯糸を組み合わせるによって織り上げますが、絵絹は通常の絹織物と異なり、織る前の生糸(原糸)に特別な加工を必要とします。

- ① 経糸の加工は、生糸の油分を洗い落とし、米糊と白蠟に浸します。緯糸の加工は、油分を洗い落とした後、薄く溶いた米糊に浸します。



糊付け(経糸・緯糸)



天日干し乾燥

- ③ 仕上げる絵絹の厚さや幅の織り密度によって糸と織機を調節しながら織っていきます。



織機全体図



織場にて

- ② 整経(経糸の準備)が終わると、今度は整織(機械にかける)をします。

絵絹は、日本画の基底材に使用するため、絹の収縮に気を遣います。そのため、織り場は常に湿度が高い環境にしていなければなりません。入念に準備した後に丁寧に織っていきますが、織る技術は難しく、熟練の腕がいる工程になります。

経糸の工程



経糸繰り



整経時の糸立て



整経機よりの巻き取り

緯糸の工程



緯糸繰り



緯糸の浸し



緯糸の管巻き

- ④ 絵絹は織った後の加工は行わない絹織物になります。絵を描くときに筆が引っ掛からないよう織り地を検査して仕上げます。絵絹は反物の形で製品となり、長さが約23メートル=一疋^{ひき}という形で取り扱われます。幅は使用する目的に近いものが求められますが、サイズとして尺幅約30cmから3尺3寸幅(約1m)があります。

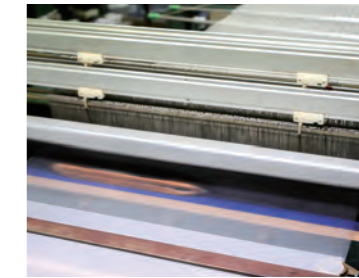


絵絹(製品)

- ⑤ シャトルは経糸の間に緯糸を通すために使われる道具です。



シャトル



織機(部分)

3 日本画の中での絹絵について

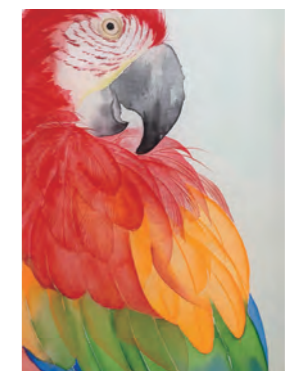
日本画を描く素地の一つとして絹があり、その特別な絹のことを絵絹と呼んでいます。糸密度が均整^{ちみつ}で緻密に織られ、実際に絵を描くときには、^{ドーサ}滲みや^{にかわ}弾きを止める^に罌水を引いてから用います。罌水とは、膠にミョウバンを加えて湯で溶いたものであり、絵絹の表面に薄く刷毛で引いて用います。

このように処理をした絵絹に描かれた日本画は、和紙に描かれたものより発色が良いともいわれています。

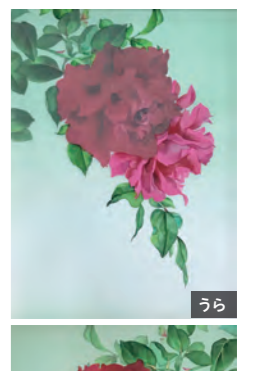
また、絵絹に描くことでしかできない特別な表現方法もあります。薄くて張りのある絵絹は、味のある暈しや裏から彩色することで独特の表現が可能です。

① 基本的な着色

絹は筆跡が残らず発色の良い滑らかなグラデーションを描くのに適しています。滲みどめをすることでシャープな線や細かなものも描くことが可能です。



基本的な着色

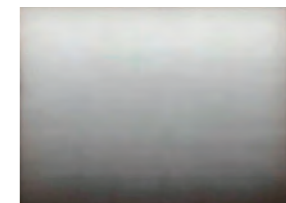


うら

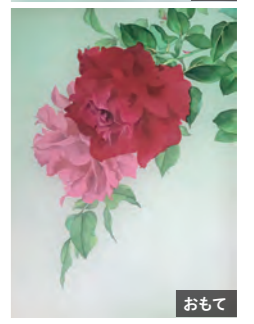
② 裏彩色技法

裏彩色は文字通り支持体の裏から色を乗せていく技法で、版画など紙本の表現にも使われていますが、透過性のある絹を使用した場合その特色はより顕著に表れます。

表出するその色彩には、絹という空気の層を挟み込んだ様な柔らかさがあり、控え目な彩度の中に奥ゆかしい品格を感じます。



暈し技法



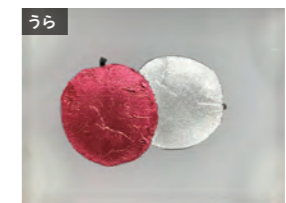
おもて

③ 暈し技法

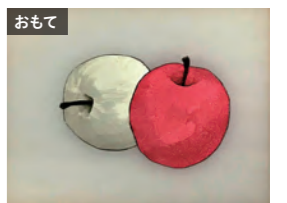
絹の暈しは全体に水を均等に与えてからおこなうと、筆や刷毛の震えを拾うことなく、紙に比べグラデーションを容易に作るができます。丈夫なものでし何か失敗をした場合でも復活させやすい素材です。

④ 裏箔技法

裏箔とは、画面の裏側から箔を貼る技法のことを指します。今回は2つのりんごに裏から銀箔と親和金箔の赤色を貼りました。裏から箔を貼ることで、表から見たときに箔の輝きが抑えられ、落ち着いた印象になります。



うら



おもて

裏箔技法